

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

超近代とは何か 2

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE 生田長江批評選集 超近代とは何か 2 信と善 書肆心水
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

超近代とは何か
2

信と善

目次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

(序章) 何故鳶が鷹を生むか (全人格的優劣は遺伝しない)

I 宗教性の審問

宗教その物としての大乗仏教対大乗キリスト教 附、二度目の宗教改革としての近世社会主義思想

虫のいい「人類」 その他

無抵抗主義、百姓の真似事など

宗教的な履歴書一通

現代を指導し得べき宗教的偉人 (その具有すべき芸術家的性格)

難行苦行を排す 中道こそ最も仏教的な実践道

II 解放主義の審問

所謂人道主義改造論者の不徹底

ブルジョアは幸福であるか

マルキシズム自体の阿片性 反宗教運動者等への一撃

ルンペンの徹底的革命性 及び宗教その物としての教祖的精神

ルンペンの問題

逆境は冷酷にするか

ルンペンの問題への一補遺

復讐的革命と宗教的革命

復讐好きな人々だけがマルキシズムに堪えられる

III 性差別論の審問

家庭保存の新論拠

大抵の社会主義的家庭觀に反対して

新貞操論

(恋愛享楽の必要条件として)

婦人解放論の浅薄さ

山川菊栄夫人への反駁

(婦人非解放論の浅薄さ)について

恋愛の意義

(性慾および結婚との関係における)

233

208

203

186

168

160

154

146

137

128

(附録) 生田長江略年譜

250

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

超近代とは何か 1 新と旧 目次

生田長江氏 三木 清

I
新と旧
(序章) 自由と思想と現在の一瞬と

「新しい」「古い」の問題

「近代」派と「超近代」派との戦

超近代派としての重農主義芸術 (農村のための地方的小都市と世界的大都市のための農村と)

農村問題断片 (都會の農村掠取による近代的階級化の構造)

一般的に外国語を学ばしめることの愚劣さ (および国営翻訳出版事業、そして国際版権条約の不均衡性)

英雄崇拜は笑うべきか (神性にして神的な人間性)

文壇の新時代に与う (全体性から離れた細部的で風変わりな表現技巧について)

序にもう少し新しく (自称「新時代」者の言説傾向について)

II 東洋性・日本性と世界史の局面

東洋人の時代が来る

徹底的破壊力としての東洋文化 (資本主義制度の根本的克服のための)

最終的文化統合者としての日本 (全人類的新文化創造への日欧文化融合)

ニーチェ雑観 (日本のものと仏教的なものをめぐって)

III 反時代的文芸考

一般群衆と文壇的群衆と

文芸家と文壇家

日常生活を偏重する悪傾向 (天才者を凡人化することについて)
流行児、問題にされることなど

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

生田長江批評選集

超近代とは何か2

信と善

凡例

一、本選集『生田長江批評選集 超近代とは何か』（全二巻）は、生田長江（一八八二～一九三六）の批評文のうち後期の約十五年間（一九二〇年以降）に発表されたものから「超近代」の論点に関わる文章を選んで集めたものである。『超近代派宣言』（一九二五年、至上社刊）所収のものを中心に、その大部分（二十四篇中の十九篇）と、その他の十六篇を収録した。

一、第一巻の巻頭に、生田長江の仕事を簡単に紹介しつつ批評した三木清著「生田長江氏」を収録した（新漢字新仮名遣い表記に変更し、読み仮名ルビを補った）。第二巻の巻末には生田長江略年譜を附録した。

一、各篇を括ったI II IIIの分類と文言は本書発行所によるものである。
一、各篇のサブタイトルのうち、（）で括ったものは、(1)本書発行所が内容紹介として補ったもの、(2)元々あつた（サブタイトルとしては長きに過ぎる、あるいは明快さを欠いた）サブタイトルを廃して本書発行所が付け直したものである。

一、元の文章はいずれも旧漢字旧仮名遣いであるが、本書では新漢字新仮名遣いで表記した。元の文章における鉤括弧使いは「「」」の形式であるが、これも現代風に「『』」の形式に置き換えた（書物名、雑誌名についても「『』」を使用）。

一、旧漢字ではないが、現今の慣例に適ったものとして置換した漢字は次の通り。卅→三十、聯→連、輯→集、劃→画。

一、行内に挟み込んだ（）括りの二行割注は本書発行所による便宜的な注記である。

一、現今漢字表記することが稀なものは仮名表記に置換した（置換したものはこの凡例の末尾に列挙）。
一、送り仮名は原則として元のままであるが、べく一部、現今の感覚で違和感もあらうと思われるものについては

送り仮名を加減した（例えば、味い→味わい、流→流れ、更らに→更に）。

一、読み仮名ルビ（振り仮名）は元のもののに若干補った。

一、外国人名の片仮名表記を現代風にしたものがある（例えば、ヘエゲル→ヘーゲル、シェキスピア→シェイクスピア）。

一、生田長江の癖、というべき表記を改めたものがごく少数ある（例えば、あだかも→あたかも、欠ぐ→欠く、畢竟するに→畢竟するに、行きつまる→行きづまる）

一、平仮名表記されている幾つかの語を漢字表記に置換した（例えば、まん着→瞞着、さく取→搾取、き憂→杞憂、むじゅん→矛盾）。これらは、生田が『超近代派宣言』の序文において、「漢字排斥主義の新聞の学芸欄に載せて、減茶苦茶に仮名に改められたのを、再びもとの漢字に書き直すつもりでいながら、矢張時間上の余裕のない為に、ついにその儘にしてしまったものの少なからずあるのは遺憾である」と述べているものにあたると推定したものである。

一、踊り字（繰り返し記号）は「々」以外不使用とした。

一、読点を補足したところが多少ある。例えば、いちにと読む一二など。また過剰な読点を削除したところがごく少数ある。

一、仮名表記に置換したものは五十音順に次の通り（送り仮名は代表例を、活用するものは終止形のみを示した）。

嗚呼、愛蘭、亞細亞、亞米利加、雖も、英吉利、聊か、孰れ、伊太利、苟くも、愈、況んや、印度、斯く、此（かく）の、瓦斯、曾て、嘗て、曾つて、加特力、切支丹、希臘、基督、蓋し、斯う、喬答摩、茲、此、哥林多、是、之、扱て、儲て、然し、而し、然も、而も、屢々、暫く、耆那、宛（ずつ）、乃ち、西班牙、然う、其、抑々・抑も、啻に、独逸、兎角、兎に角・とに角、兎もあれ、兎も角・兎もかく、兎もすれば、兎や角、乃至、尚お、乍ら、加之（のみならず）、婆天連、仏蘭西、可し、波斯、略ぼ・略々・略、亦、馬太、儘、馬可、寧ろ、固より、矢鰐、矢張、稍、動も、猶太、歐羅巴、約翰、路加、羅馬、露西亞

(序章) 何故鳶が鷹を生むか

(全人格的優劣は遺伝しない)

一八六六年、有名な科学者でも何でもない一介の僧侶メンデルが、豌豆の遺伝に関する四十頁ばかりの小論文を発表した時、科学者達の唯だ一人も、それに対して何等の注意を払うこともしなかつた。そしてそのまま二十世紀の初年に及んだ。とにかく四十年近くを経過してからでも、あの偉大な遺伝法則の発見者メンデルの名が想い起され、あれほどの栄誉を帰せられるに至つたのは、むしろ一の立派な奇蹟であらねばならぬ。

メンデルの発見が、右の如き運命を通りぬけねばならなかつたのは、改めて云うまでもなく、有名な科学者によつてなされたものでなくして、単に一介の僧侶によつてなされたものであつたからである。その上、余りにも新しすぎ、余りにも時代を超越していたからである。

今日の遺伝学は、殆んどその全部が、メンデル法則の適用と間違ひだらけの適用とから成立している。メンデル法則の間違ひだらけな適用を基礎として、その上に愚かしくも築き上げられたる似而非科学が所謂優生学である。

優生学は未だ人情を解するに至らない年少者の無邪気さと快活さとを以て言う「生れながらの不具者や、病弱者や、狂人や、犯罪者は劣等人である。そしてそれらの劣等人が同じく劣等人であらうところの子孫を残さ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

(序章) 何故鳶が鷹を生むか

ないではない故、彼等をして絶対に子孫を残さしめないようには人種全体の為に必要である」と。

或る事に関して、一方の人間を低劣であると云い、他方の人間を優秀であると云うのは、極めて穩当な事であり、随つて私共の日常やつているところの事である。

全体的に、人間として、一方を低劣と云い、他方を優秀であると云うのも、常識的な言葉として必ずしも許されないことではない。

しかしながら、我々人間の目今まで、如何に立派そろに見える人でもが、神の前に丁度正反対な物であり、我々人間の目にまで、如何につまらなさそうに見える人でもが、神の前に丁度正反対な物であり得ることを信ずる限り、神ならぬ人間の我々は、我々自身に対してのほか、そもそも何人に対しても不敵なる瀆冒的宣告を下し得るものぞ！「彼等は生れざりしならば幸ならん。汝等は生れざりしならば幸ならん」と。

優生学者等からして「生れざりしならば幸ならん」と刻印を打たれるところの先天的不具者、病弱者、狂人、犯罪者等は、勿論定型の人間であるよりも変質的人間であると云われ得るであろう。

だが、特に数千年の文化史をもつてゐる、最高生物としての人類界に於て、単に定型的であるということが、果してそれほど善い事であろうか。単に変質的であるということが、果してそれほど悪い事であろうか。定型的でないのが、変質的であるのが、直に劣等人たることの条件をみたすものであるとしたら恐らくは最も多くの割合に於て、定型的ならぬものを、変質的なものを有つてゐる人間種属は、種属としてまた最も劣等なものになるものではあるまいか。

優生学者等よ。もしも卿等の言う如く、単に生れながらの不具者が劣等人であるとしたら、塙保己一は劣等人であつたろうか。

単に病弱者であることが劣等人であるとしたら、正岡子規は劣等人であつたろうか。
単に狂人であることが、ないし精神異状者であることが劣等人であるとしたら、ニーチェは、ドストエフスキーや、マホメットとボーロとは劣等人であつたろうか。

単に犯罪者であることが劣等人であるとしたら、ヴェルレーヌやワイルドなどは劣等人であつたろうか。^{ついで}序ながら不敵にも朝憲を紊乱したり、社会の秩序を破壊したりしたというので、殆んどのべつに「別荘ばいり」をさせられている社会主義的犯罪者堺利彦氏、山川均氏等は、また犯罪者たるの故を以て劣等人と云われるであろうか。

一方を優等人とし、他方を劣等人とすることが許されるにしても、優等人であるか劣等人であるかを決定するのは、個々の生理的心理的傾向が定型的であるや否やでなく、変質的であるや否やでない。むしろ全体として、人間として、人格的存在として、倫理的に又審美的に、優秀であるかそれとも低劣であるかである。

へぼ絵かきと、それに相応した友人のディレッタント等とは、いつも仔細らしげに言う——あの色この線は、全く善い色、善い線であると。殆んど、それらの色彩や線条を画面の全体から切りはなして見ても、なお且つ美であり、醜であり得るかのようである。

似而非科学「優生学」の信者等は、如何なる個々の生理的心理的特徴傾向も、それ自身優等なものでも劣等なものもあり得ないということ、それらの特徴傾向全体を結合し配列する上の仕方に於て、はじめてそれぞ

SAMPLE
Shoshi-chinsui.com

れの価値を、人間的価値を生ずるということを思わないものである。

どもりは普通の場合頗わしいものではないだろうが、三宅雪嶺先生や、大杉栄君などに於ては、むしろ一種の品位となり、もしくは魅力となつてゐるではないか。

亡くなつた大隈侯爵に於ても、あの片脚をなくされたことが、本来の長広舌をいよいよ長広舌にし、本来の「世界的偉人」をいよいよ「世界的偉人」にして行つたのではないか。

電光石火の早業が、手品師にあつては、身を助ける芸となり、巾着切りにあつては身を滅ぼす本となる。

ドストエフスキイにあつては、癲癇が彼の芸術の最善なるものを産み出させることに役立つてゐる。けれども、汽車や電車の運転手等に癲癇の発作があるというのは、単に仮定して見ただけでも我々は戦慄を禁じ得ないではないか。

ニュートンはその二匹の愛犬をして自由に出入せしめる為、大小二の孔を扉にあけた。大きな犬の為に大きな孔が必要である如く、小さな犬の為にも小さな孔が必要であると考えたのである。

彼はまた鶏卵を煮て いるつもりで、懐中時計を鍋の中に入れていた。恐らくはその手に鶏卵を握りながら、懐中時計を見つめる如く見つめていたことであろう。

かくの如き心理的特徴傾向は、ニュートンなどの場合に於て天才を証明するものとなり、普通の場合に於て

SAMPLE
Shochi-Shinsui.com

低能を証明するものとなっているではないか。

再び言う——これを劣等人と云い、かれを優等人と云うようなことが許されるにしたところで、その劣等人であるか優等人であるかを決定するのは、個々の生理的心理的特徴傾向に定型的ならぬものがあるや否や、変質的なものがあるや否やでない。むしろ、それらの特徴傾向を総括している一全体として、人間として、人格的存在として倫理的ないし審美的に優秀であるか、それとも低劣であるかである。

ところで、似而非科学「優生学」の信者等は、個々の生理的心理的特徴傾向に、定型的ならぬもの変質的なもののあることが、直に劣等人であると云う風に考え、そして個々の特徴傾向がメンデル法則等に従つて遺伝される故、概して劣等人の子孫には、必ずどれだけかの劣等人が出て来るという風に考える。換言すれば、人間としての価値、人格的価値、その物が遺伝されるものと考えるのである。

だが、読者諸君よ、人間としての価値、人格的価値その物が果して遺伝されるであろうか。悪人の子孫の中のどれだけかが、必ず「悪」その物を遺伝されるであろうかどうか。醜婦の子孫の中のどれだけかが必ず「醜」その物を遺伝されるであろうかどうか。

雌雄の鳶（劣等鳥としての）は、必ず鳶を生まねばならないであろうか。

鳶と鷹との間に生れたもののどれだけかは、また必ず鳶でなければならないであろうか。

重ねて言う、人間としての価値、人格的価値その物が遺伝されるであろうか。

恐らく、大多数の諸君の健かな本能と、こまやかな感覚と、気高く美しい感情とは、声を揃えて力強く「否」を叫ぶであろう。

(序章) 何故鳶が鷹を生むか

だが、諸君の中の何人の理智がかつて、「価値は決して遺伝されない」というこの一大事実を明白に指摘してくれたであろうか。

優生学の根本思想を何となく瀆冒的に感じている人々の如何に数多くあることぞ。それにもかかわらず、これまで唯だの一人でもが、優生学を全然似而非科学的であり、非科学的であり、単に笑うべき出鱈目にすぎないと云うことを喝破したであろうか。ただの一人でもがそれをなしたであろうか。

余りにも知れ渡り過ぎてゐるメンデルの法則などを細説したり、染色体論を中心とした當時流行の、けれども少なからず怪しげな仮定論の色々なぞを講釈したりすることは、今の場合控えて置こう。

ともあれ、平たく言つて受胎の際、両親の生理的及び心理的性格は、それぞれに先ず個々の微細なる遺伝因子に分解される。この事は今日大抵の遺伝学者等からも承認されている。ただ私は、右の分解が彼等の考へているよりもずっとこまやかな、殆んど無限にこまやかなものであるかも知れないことを言つて置きたい。

さて第二には、右の如く分解された父方の遺伝因子と母方の遺伝因子とがすっかり混淆されてしまう。

さて第三には、右の如く混淆された遺伝因子の中、同一傾向のものは相合してより力強いものとなり、反対

傾向のものは相斥けて、より無力なものとなり、時には殆んど無きに等しいものとなるであろう。

さて第四には、右の如き変化を受けた遺伝因子が、父の性格とどちらがい母の性格とどちらがつた、全然新しい一の性格に、生理的及び心理的性格に凝結してしまう。

両親を同じくする場合、子供達の性格にふくまれてゐる遺伝因子は、皆同一である。ただ受胎の時を異ににするところから、凝結の結合配列の仕方を異にし、従つて非常に異なる性格を造り上げるのである。時として

はあれでも兄弟かと思われるほどのものを造り上げてしまうのである。

兄弟にして若し、遺伝因子の凝結具合をさえ同じくされていたならば、その生理的心理的性情全部が全然同じものであつたろうということは、殆んど受胎時を同じくする双生児が、肉体的にも精神的にも、殆んど区別の付かない位に似通つてゐるという、あの顯著なる事実を土台にして十分に推定し得られるではないか。

毛がちぢれているとか、色が黒いとか、鼻が低いとか云うようなことが遺伝因子であるとしたら（頭の悪い遺伝学者等は往々にしてそう云う風に考えるのだが）、両親のどちらよりも毛がちぢれていなかつたり、両親のどちらよりも色が黒くなかつたり、両親のどちらよりも鼻が低くなかつたりするのは不思議な、不合理な事である。

けれどもそれらの特色が、そのまま遺伝因子になるのではなく、もつともつと微細な殆んど名状しがたくこまやかな特色に分解されて、はじめて遺伝因子になるのだとしたら、子供が両親のどちらにも似ない髪の毛や、肌色や、鼻などを有つてゐるとしても、別に不合理と考えるにも及ばないではないか。

髪の毛や、肌色や、鼻の格好さえ、そのままには遺伝するものでない。
それらの物の取合わせがそのままに遺伝されないのはなお更のことである。

美しい美しくないのは、各々の部分によつて決定されるのではなく、全体の取合わせによつて決定されるのであるとしたら、美人の子に美人が出来ないとしても、「美しい」という価値が遺伝されないとしても、それはむしろ当然すぎるほどの事ではないか。

SAMPLE
Shoshi-Sensei.com

(序章) 何故鳶が鷹を生むか

道徳的に立派な人物であるとかないとかいうのも、その人格を構成する所の各の部分によつて決定されるのではなく、全体の取合せ塩梅によつて決定されるのであるとしたら、そして遺伝されるのが各の部分の部分にすぎないとしたら、個々の生理的及び心理的特徴傾向は遺伝されても、全体としての人間としての価値は、人格的価値は遺伝されないというのに、いささかの不思議な事もないではないか。

取り合わせの上から、親にあつてはむしろ瑕瑾であったところの高からぬ鼻が、子にあつては単に邪魔にならないのみならず、むしろ積極的にその顔を魅力あるものにしていることさえある。

価値は遺伝しないのである。

取合わせの上から、親にあつてはとにかくない方がよいと思われるそばかすが、子にあつてはむしろ美しさを加えるものとなつてゐる。

価値は遺伝しないのである。

一事に熱中すれば前後を忘却してしまうという性質が、親爺をして金儲けの為に前後を忘却せしめ、息子をして芸者買いの為に前後を忘却せしめるのは、極めてありがちな事である。

個々の特徴傾向は遺伝されても、全体としての価値は遺伝されないのである。

楠正成の子に正行があつても、そのまた正行の子に正儀があつても、「勤王の志」が遺伝されたのではない。むしろ遺伝されるもののように思ひせたり、思つたりしたことが、強烈なる暗示となつて働いたことを考え

ねばならぬ。

更に、さまざまな感化や教育が、彼等を父の如き、祖父の如き勤王家に作り上げることに貢献していることを注意されなければならぬ。

泥棒の子が泥棒になり易いのも、盜癖その物が遺伝されるのではない。

泥棒の子だと言われたり思つたりすることが、彼の道徳的自尊心を放棄させてしまい、自制力をなくさせてしまうこと、盜癖が遺伝されるように思わせられたり、現に盜癖があるかも知れないとして警戒されたりする内に、悪い暗示が働いてついに泥棒をさせてしまうと、いうようなことを注意すべきである。

序ながら所謂盜癖は、盜癖を自制する意志力の不足の事である。動物的衝動としては総ての人々に盜癖があるのだが、大抵の人々はその愚かさを抑えるに足るだけの意志力をもつてているのである。

總じて犯罪者の子孫に犯罪者が多く出ているとしても、それは頭の悪い優生学者の考える如く、「犯罪性」がより精しく云えば「強盜性」や、「虐殺性」や、「脅喝取財性」や、「無政府主義性」や、「不敬罪性」が遺伝されているのではない。

余程こまかに分類に於ても、父祖と甚だ似通つた種類の犯罪者になる場合——それでもやはり遺伝の結果であるより以上に、悪い暗示と感化と、並びに父祖同様の不幸なる生活条件の結果であるように思われる。

六本指だとか、三口だとかいうようなどんなに大きい変質的傾向が遺伝される場合にも、なお且つ人間としての価値、人格的価値その物が遺伝されているのでない。

なぜと云つて、親に於てその人間的価値を低める方に役立つていた同じ不具性が、子に於てはその人間的価

SAMPLE
Show-Shishi.com

(序章) 何故鳶が鷹を生むか

値を高める方に役立つというのは極めてあり得べき事なのだから。

例えばバイロンの悪い脚が遺伝的なもので、そしてそれが彼を偉大ならしめる上に、非常に役立っていたかも知れないことを考えて見るがよい。

人間的人格的価値その物が遺伝され得ないとしたら、劣等人の子孫の中に必ず劣等人があるという優生学、及び優生学的思想は、何という非科学的な、何という笑うべき出鱈目であるかよ。

定型的であることが、種属保存に好都合であるとしてもよい。変質的傾向をもつた人間の増加が人類という種族を保存する上によくないとしてもよい。

人類は愚かなる自然科学者等がお芽出度く軽断している如く、人類という種属を保存する為に存在しているのではない。

人類は個々としても、全体としても、今少し意味のある、今少し厳肅な、今少し高貴なる目的の為に存在している。

そしてその本当の目的を達する為にこそ、種族を保存して行くことの必要もあるのである。

だから、その本当の目的を達してしまった時――それはいつの事だか知らないが――人類はもはや一刻をも残存することを要しないのである。

優生学者及びその信者等の如き、單に著しい変質的傾向を有しない（これも実際は怪しいが）だけの定型人、或は凡庸人共が、一切の非凡人を斥けて、彼等のみ永久にこの地球の表面を這い廻っていたところで、それに

何の意味があるだろう。

むしろ釈迦牟尼や、ナザレの耶穌や、アッシジのフランシスや、ダンテや、シェイクスピアや、ミケランジェロや、ベートーフェンやニーチェのような非凡人が、一万人ほどでも、千人ほどでも、いや単に百人ほどでも今一度生れて来て、そしてそれの人々が死ぬると共に、人類全部が地上から消え失せてしまった方が、おおその方がどれだけ慶ばしいことであろうか。

人類はその最終最高の目的を実現する為に必要であるならば、断乎として種属保存というが如き第二次的、第三次的目的を犠牲にすべきである。

人類を單なる獸としてのみ見るところの、愚かしく、僭越な、瀆冒的な優生学者及びその信者等が何を知つてゐる。

鈴弁殺しの山田憲君を、世俗の評価している如く、「大惡」人であるとする。なお且つ山田憲君の子孫の中に、必ず「大惡」人が出るだらうというのは、何等の理由なき推定である。なぜと云つて、憲君の個々の変質の特徴傾向は遺伝されるであらうが、「大惡」その物は決して遺伝されるものではないからである。

人間の魂の前に脆くことを知つてゐる信心深き読者諸君よ、諸君は今涙と憤激とを以て、世にも薄倖なる山田憲君の遺児、及びそれを取りまく一家門の人々を想い出してくれたまえ。

謬れる遺伝觀念と、出鱈目な似而非科学「優生学」との為に謂われなく迫害されながら、なお且つそれを理由あるものにさえ思わせられている、あの薄倖さは眞に言語を絶しているではないか。

人間としての価値、人格的価値その物の決して遺伝されないことが明白になつた時、低劣な人物を肉親の中

SAMPLE Shoshinshui.com

にもつてゐる人々が、如何に救われたように感ずることぞ。

「価値は遺伝されない」という私の格言が一般に承認された時、劣等人を祖先にもつた人々もはじめて自尊心を取り返すことが出来よう。従つて、道徳も、宗教も、魂を取扱う一切のものが、はじめて久々にその失われたる権威を回復することが出来るであろう。

個々の生理的特色傾向に人間的、人格的価値があるのでなく、むしろそれらの特色傾向全体の取り合わせによつて優等人が出来上つたり、劣等人が出来上つたりするものであるとしたら、そしてそれらの特色傾向の或る物を助長させたり、他の物を萎縮させたりすることが可能であるとしたら、悪い教育や訓練によつて非常に低劣な人間になつたであろう人々が、善き教育や訓練によつて非常に優秀な人間になつたであろうことは、たやすく想見出来るではないか。

これから出発して、私は山の芋が何故鰯になるかを説明し得られることを信ずる。

巧妙なる修正者は、ほんの一句か一字を増減することによって一篇の、へゝ文章を、まるで似てもつかないような名文章に改めてしまう。

「人間」という樹木に手入れをする天才的な植木屋「教育家」は、生理的にも心理的にもほんの一寸した鉄の入れ方で、野育ちのとまるで別物のような、立派な「人間」を作り上げて見せるのである。

広義に云つて環境が、如何に個々の生理的心理的特色傾向に影響し、そしてその結果人間としての価値、人

格的価値その物に著しい影響を及ぼすものであるかといふこと、これについて細説精論するのは他日の機会に譲ることとする。

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

(1924.6)

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

I

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

宗教性
の審問

宗教その物としての大乗仏教対大乗キリスト教

附、二度目の宗教改革としての近世社会主義思想

主義政見の上に格別の距りもない無産党諸派の間に合同問題が持ち上った場合、一般党員の希望、並びに世上の輿論に逆行してまでも、所謂幹部の人達がしばしば合同に反対するのは、何よりも直接彼等自身の私的利害関係からである。

民政党、政友会なども、全然同一の階級的立場を有つて居り、又殆んど似たり寄つたりの政見政綱を掲げて居りながら、常に不俱戴天の仇敵でもあるかの如く互に争闘し合つてゐるのは、一にただ政権争奪その事をのみ目標としていて、掲げるところの政見政綱をさえ、眞面目に実行する意志を有たないほど厚顔無恥になりきつているからである。

今日なお、仏教徒と云いキリスト教徒と云う人達の間に、醜い抗争敵意の存在するのを折々見出すのは、何よりも先ず彼等が専ら教権争奪をのみ念頭に置いてゐるからである。

仏教徒に於てもキリスト教徒に於ても、彼等がその信念の故に和合し得ないと見るのは、彼等に対する非常なる買被りである。彼等は彼等の信じてゐる筈の仏教をもキリスト教をも、實際には全く信じていないので、当然提携すべき場合にさえ提携しないのである。

宗教その物としての大乗佛教対大乗キリスト教

よし何等かの信仰らしいものを有つてゐるとしても、佛教徒なるが故にキリスト教徒と手を取り合うことが出来ないとか、キリスト教徒なるが故に佛教徒と歩調を一にすることが出来ないとか言う人々があるならば、その人達は自己の奉ずる宗教と他人の奉ずる宗教との本質的関係を余りにも知らなき過ぎると云わなければならぬまい。

若し佛教とキリスト教とが到底調和されがたく一致しがたいものであるとしたら、佛教各派はどうして一になり得るか？ キリスト教各派はどうして一になり得るか？

カトリックもクエーカーもユニテリアンもキリスト教として帰一されることの可能を認める人達が、又一方では華嚴天台や、教外別伝や、浄土門をも十分調和さるべき思想として許容している人達が、仏耶両教の間のみ竟に躊躇^{なんびと}えがたき溝があるかの如く考へるとしたら、それは余りにも愚かしき沙汰ではないか？

何人も知つてゐる如く、唯だ一口に佛教と云つてゐるけれど、この名称に包括されているものの中には、所謂八万四千の法門がある。ありとあらゆる種類の宗教思想が、思想体系がある。

多くの場合、爾余の諸宗教に対比して、厭世的と云われてゐる佛教の中にも、或る意味に於てはむしろ大いに樂天的と見るべきものが決してなくはない。

又、多くの場合理性的と云われ得べき佛教の中にも、正反対に感情的と云われるようなものが如何に少なくないことだろう。のみならず、理智に対する情意としてならば、情意的でないものこそむしろ稀であるかも知れない。

起源から見れば、勿論釈尊によつて、若しくはその後の宗祖等によつて創唱された人格的の宗教たること勿

論ながら、大多数の現実の信仰情態からすれば、伝承的民族的宗教のそれとどれだけ異なっているだろう。

我が国民との、ないし皇室なぞとの特殊の深い関係を力説したがる人々に於ては、仏教が普遍的宗教であるか、それとも国民的部族的宗教であるかは問題でなければならぬ。

理論上には無神教、もしくは汎神教として扱われている仏教が、實際上には、如何にしばしば多神教であり、もしくは单一神教であるか？否、一種の精靈崇拜、天然崇拜とさえも見えるものの如何に稀らしくないことか？

學者は仏教が唯物論に対する唯心論であり、もしくは唯物論唯心論の何れをも超克したものであることを言う。けれども實際に於て、最も粗悪な唯物論より以下にあるものが、如何に少なくないだろう。

教祖自身からつねに医薬を用いていたりした釈尊の教えが、所謂依蹟に倚頼しない宗教であり、本来科学と最も歩調を合して行き易い宗教であることは勿論ながら、実践的密教その他を包括して觀た場合、如何にそれが反科学的もしくは非科学的なものでもあることか？

中道的と云うのが仏教の本質であり、本質の中の本質でさえもあることは改めて説くまでもない。然るに實際に於ては、苦行を捨てられた教祖よりも、苦行林中に幾年かを過ごされた教祖により多くの及び難さを感じる大多数の仏教徒等は、ないしそれらと唯だ対蹠的にのみ克己と不放逸とを輕視して行く人々とは、皆悉く苦樂二邊のいずれかに偏墮し去つてはいるではないか？

その他、倫理的、超倫理的、反倫理的と云うような問題について見ても、自力他力の問題について見ても、戒律等について見ても、制度儀式等について見ても、仏教と云う一の名称をいただきながら、その下には殆んどありとあらゆる見方、考え方、感じ方が一切の宗教的思想体系が横たわっているのである。

宗教その物としての大乗佛教対大乗キリスト教

すなわち、仏教というものの中に、実際上一切の宗教的思想体系が包括されているという意味に於て、仏教は宗教その物であると見ることに、何等の不都合もなさそうに思われる。

だが、今ここに、それらの各種の宗教思想を単に包括しているだけでなく、更にそれを総合し統一して、渾然たる一体系をなしているのが大乗佛教であるとしたら、大乗佛教こそは更に一層、宗教その物であり得ると思う。

大乗は改めて云うまでもなく、小乗に対置された概念である。けれども、同時にそれは小乗の、より高くされた見地であり、より広くされた視野であり、のみならず、それぞれの低級思想をも何等かの価値と見る限りに於て、一切の低級思想を超克し、止揚しているところの、従つて一切の低級思想をも総合統一しているところの渾一体系である。

処で、私は大乗という仏教用語を、他の宗教、とくにキリスト教にも適用して、例えば大乗キリスト教というような言い方をして見たい。

仏教が殆んどあらゆる種類の宗教思想を包括している如く、キリスト教もまた殆んどあらゆる種類の宗教思想を包括していることは、何人も恐らく承認するに躊躇しないであろう。

そして、この意味に於てキリスト教もまた、仏教の場合と同様に宗教その物と云われていい。

しかしながら、仏陀その人の信念もしくは宗教思想を根本仏教とし、それから差別された原始佛教徒もしくは初代佛教徒のそれを小乗佛教とするならば、キリストの信念もしくは宗教思想を根本キリスト教とし、それから差別された原始佛教徒もしくは初代キリスト教徒のそれを小乗キリスト教と呼ぶことに差し支えはあるまい。そして今日なお一方には小乗キリスト教のままであるものがあるのに対し、他方には一種大乗的とも云う

べき展開を成し遂げているところのキリスト教が見出されないであろうか？

仏教徒にとつての釈尊や、キリスト教徒にとつてのナザレのイエスが、少なくとも最も偉大な宗教的人格であつた限りに於て、大乗的展開を遂げれば遂げるほど、仏教もキリスト教もいよいよそれぞれ教祖の真精神に近づいて来たと見られねばならぬ。

この場合、釈迦牟尼仏を仲介者としないで、法身仏の金口から直接に説かれたと称するところの密教さえもが、大乗仏教に包摂されるとしたら、エマソン、トルストイなどの思想は勿論、スピノーザの思想なども、否、自ら反キリストを以て任じていたニーチェの思想その物さえもが、なお且つ大乗キリスト教に包摂されると言つたところで、何人もそれに理由がないとは云い得ないであろう。

かくの如く観て来れば、大乗キリスト教は大乗仏教の場合と同じく、単に一切の宗教思想を包含するというだけのものとしてではなく、むしろそれらを超克止揚したもの、綜合統一したものとして、より妥当なる意味に於て、實に宗教その物であると云われ得るではなかろうか？

序ながら、ヨーロッパやアメリカなどに於て、いやしくも思想家と云われることを値してゐるほどのキリスト教徒にして、私の所謂大乗キリスト教徒ならざるものが、唯だの一人でもあるだろうか？

又、フリードリッヒ・ニーチェの場合に於ける如く、ナザレのイエスによつて播かれた種子の、いと善き收穫の一である限り、これまでのあらゆる歐米思想の崇高偉大なるものを、悉くキリスト教思想の一形体として扱うのも、決して許されたいことではあるまいと思う。

勿論宗教その物としての大乗仏教とか大乗キリスト教とか言つたところで、現実には、常に同一の思想があるのではなく、むしろいくつもの異なつた思想があるのであり、それらを一方に大乗仏教として最終の綜合を

SAMPLE
ShowHiShinji.com

宗教その物としての大乗佛教対大乗キリスト教

試み、他方に大乗キリスト教として最終の綜合を試み、そして二の物を対比して見たところで、恐らくは依然として全く同一のものにはなり切らないかも知れない。

しかしながら、全く同一のものになり切らないというのは、殆んど總ての場合に於て、実践的の援助をし合ひ、歩調を合わせ手を取り合つて行くことの必要を疑わせるほどに、それほどの距りがあり得るという意味ではないだろう。

勿論、宗教は宗教的な思想であると共に、宗教的な生活でもなければならぬ。そして大乗佛教と大乗キリスト教とであっても、思想の上に合致するほど生活の上にも合致するかどうかは容易に云えない。

又、宗教は抽象的な思想であるより以上に具体的な思想でなければならぬ。宗教その物としての大乗佛教対大乗キリスト教も概念化された場合の殆んど完全なる融合にも係わらず、生きた宗教としての運動に於て、合同はもとより、連盟提携をさえ、それほどたやすく成し得べきでないことを、私共もまた思はないではないのである。

概念化されたものとしてでなく、具体的な、生きた思想としての、謂わば一個の有機體的運動としての、一貫した持続的生命としての佛教とキリスト教とは、何よりも先ずその歴史的起源をも、發展の経路をも異にしているところから、それぞれに特有の持味や肌合^{いまと}いを有^もつてゐる。思想や生活の範圍をほぼ一にしている場合にさえ、その中心点を、力の入れどころを別々にしていることを免れない。

かなり誤解しながら、扭じまげながらでも、仏教哲学を最も戻^はり取り入れたのがショーン・ベンハウエルである

としたら、これまでの欧米人の中、最も鋭く仏教思想の特質を抉り込み、最も深い處にまで理解の手をのばしているのはフリードリッヒ・ニーチェである。

ニーチェが、インドや仏教に関する文献のまだまだいくらくも近づき難かつたあの当時に於て、仏教について如何にしばしば、如何に多くの卓抜なる観察を述べているかを知りたい人々は、彼の著作の中にも、とり分け『悦ばしき知識』、『黎明』、『善惡の彼岸』、『權力への意志』なぞを読んで見ていただきたい。（私の邦語訳にはまだ索引をつけていませんが原文にも英訳にも便利な索引があります。）

これまでの処では、ニーチェについて多少なり知っているような人々が、残念ながら仏教の、殊に根本仏教及び原始仏教について余りにも知識を欠乏していた。と同時に、仏教学者等も、ニーチェに対して関心を有したなさすぎた。

しかし、ニーチェ自身を本当に理解する上にも、仏教思想の特色や本質を明らかにする上にも、ニーチェの仏教觀を玩味して見るのは、随分有益な、或は有益以上な事であるかと思う。

宗教心理学的な、及び宗教社会学的な考察に於て、常に驚嘆すべき天才者的聰明を示したところの我がツアラトウストラの詩人的哲学者は、仏教とキリスト教との対比に際して、例えは次の如きことを言うのである――

虚無主義的宗教の中でも、なお且つキリスト教と仏教とは峻厳に差別されてよい。仏教は一の美しき夕を、一の完成された甘さ及びやさしさを表白している。それは背後にかくれてゐる総ての物に対する謝恩である。総ての物という中には、それが欠乏しているもの、苦さ、幻滅、怨恨、なぞをも含めて、最後にそれは高い精神的愛を有つてゐる。哲学的矛盾の煩瑣は超越されている。それからの安息もある。しかしながら右の源泉からこそ、それはその光輝と晩紅とを獲てゐるのだ。（最上階級から生れた宗教故。）

SAMPLE
Shoshi-Sensei.com

宗教その物としての大乗佛教対大乗キリスト教

キリスト教的運動はあらゆる種類の頽廃的因素から成立するところの一の変質的運動である。それは一種族の没落を表白していない。そもそもそれは互に引きつけ合い、互にもたれ合うところの諸要素の一集團である。……すなわち、それは国民的でなく、種族に規定されていない。それは到る処の「放逐された者」等に訴える。それは總ての旨く行つたもの、勢力ある者に対する根柢的な怨恨を有つてゐる云々。

——『権力への意志』上巻一四九頁——

佛教徒にとっては何物もポーロの如き人物のユダヤ人的狂信より縁遠くない。何物にもまして彼の本能に逆行するのは、あの宗教的人物の緊張や、火焔や、不安である。特に「愛」と云う言葉で以てキリスト教が聖化しているところの、肉感性のあの形式である。のみならず、仏教の中にその安心を見出すのは教養のある、その上精神のありすぎる諸階級である。一世紀の久しきに亘つて哲学的論争に倦み勞れた種族である。だが彼等はキリスト教を産んだ諸階級の如く、あらゆる文化の下にのみ勞れてゐるのではない云々。

——同上、一五〇頁——

かつて我々の時代よりもっと思索的な、もつと破壊的に思索的な時代があった。例えば、仏陀の出現した時代である。その場合民衆は、旧い宗派的闘争の幾世紀かを経て、遂に哲学的信条の深間へはまり込んでいた——折々ヨーロッパの民衆が宗教的信条のこむずかしさの中へはまり込んだ如く云々。

——同上、三十三頁——

我々の時代は或る意味に於て成熟している（即ち、デカダンである）——仏陀の時代と同じように。それが故一種のキリスト教主義が荒唐無稽なる信条なくしてあり得るのである云々。

——同上、二二六頁——

これらのニーチェからの断片的引用を通じてでも、読者諸君は少なくともその歴史的発端に於ける仏基^{キヤウ}二教が、かなり面白く対比されているのを見出されると共に、又特に仏陀出現の時代が、キリスト出現の時代などとは同日に談じがたく文明的に爛熟していた時代として、洞察されているのに気付かれるであろう。

前にも記した如く、釈尊は自分自身しづしづ病氣にかかるたばかりでなく、その病氣を癒す為には、当時の進歩した医術の専門家の手を煩わしていられる。

少なくとも私共が今日与えられている典拠によれば、釈尊及びその直弟子達は、所謂奇蹟的な方法に訴えて病氣を癒そななどと試みていられない。彼等の教えを受けに来る人々も、彼等から奇蹟的な何物をも期待していなかつたようである。

これに比べて、ナザレのイエスの場合は何と云う相違であろう！

イエス自らが所謂奇蹟的な行為を好んでなしたか、或はいやいやながらになしたかは別として、とにかく、甚だしばしば奇蹟的に人々の病氣を癒してやつてている。少なくとも、彼がそうした行為をなし得たと信じられて居り、その事が彼に対する民衆の信頼帰依の大切な一理由となつてゐるよう見える。

釈尊とイエスとが所謂奇蹟についてこうした別々の面目を示しているのは、思うに何よりも先ず、この二人をそれぞれに取りまいていた社会の文化情態が、非常に相異なつたものであつたからである。

釈尊時代のインドも、殊に釈尊の教えを求めてやつて来た人々の社会に於ては、肉体上の病氣をまで宗教家に癒して貰わねばならないほどの野蛮と未開とが、既に既に遠い過去の物となつていたので、釈尊以外の各教團の指導者達も大体に於てやはり、そうした奇蹟の外に超然としていたらしく推察される。

然るにイエスの出現した時代のユダヤ地方では——それは釈尊時代よりも四五百年以上もおくれてであるけ

宗教その物としての大乗佛教対大乗キリスト教

れど——魂の救いを説く人に対し、直にまた肉体上の病を癒してくれと要求するのが、いささかも不思議でないと考えられるほど一般に文化が未開であり、特に医術なぞが未発達であつたのだ。

しかも、そうした時代のそうした地方に於て、最もイエスから求められ、又イエスを求めて来た人達は、特別に教養の十分ならぬ田舎漢や、下層階級の窮民なぞであつた。

ニーチェ等の所謂デカダンス時代の、爛熟した文明の中に生れ出で、そこに成長して来た釈尊の教えは、その後種々なる文化情態をもつた社会から社会へ伝播されながら、今日見る如き宗教その物にまで展開したのであるが、その起源が起源であるだけに、今なおどつかに、野蛮人未開人によりも、むしろ文化人文明人に一層適當したような本来の傾向を保存しているではないか？

野蛮人未開人の間に伝えられた仏教は、彼等の上に大きな感化を与えていたと云えるであろうか？むしろ、仏教自体の退化と堕落の方をより多く示してはいなかつたろうか？

仏教は支那及び日本に伝えられて、すばらしい収穫を見、仏教自身の驚くべき展開を見たのであるが、支那へ伝えられた後も、本当に仏教の开花期を見るべきは、唐宋の文明が爛熟しきつた時代に於てはじめて現れているではないか？日本へ来た仏教も、最初の内は極めて皮相的な感化を及ぼすに止まっていたのが、平安朝末期の文明情態にはいつて、はじめて厳密な意味での宗教的要求を見出し、ついに鎌倉時代のあのすばらしい活動をなすに至つたのではないか？

要するに、仏教は未開人を文明人にする上によりも、文明人をその文明の為の没落から救済する上に、よりめざましき成績を挙げてゐるのではないか？そしてそれには、かなり深い理由の存することではなかろうか？

少なくとも、仏教に眼目をなしているところのものは、余りに未発達な、余りに若々しい余りに苦労の足り

ない種族や社会にとって、むしろ興味を有ちにくいのではないだろうか？或は、まだまだ本当に必要を生じていいのではなかろうか？

これに比較してキリスト教のこれまでの歴史を大観するに、これまた今日では宗教その物と云つていいほどに広くもなり高くもなつて来ているのではあるが、しかしその起源がああした起源であるだけに、今なおやはり、どつか知ら、文明もしくは超文明の中に救いを求めている人々よりも、未だ文化の光に浴しないでいるような種族もしくは階級に、より適当したような一般的傾向を保存してはいないであらうか？

キリスト教はローマにはいる場合にも、仏教が支那にはいった場合などと正反対に、教養の極めて低い階級から先ず捕えて行つたので、それがローマ人の全体を征服し了つた頃には、ギリシャ、ローマの文化も文明も、殆んど滅んでしまつてはいたではないか？

そして一方では、ローマ人に入代つて勃興し來たつた未開諸種族こそは、キリスト教によつて文化へ、また文明へ導かれ、ついに近代ヨーロッパを形作る処までやつて来ているではないか？

又、近代ヨーロッパ人等がその後、彼等自らは幾分キリスト教から脱却しあげながらでも、他の野蛮人未開人諸種族の間へキリスト教を伝えた結果は、これまたそれぞれに相応の成績を挙げて来ているではないか？換言すれば、かなりに彼等を文明化し來たつてはいるではないか？

「生きたい、永久に生きたい」と願うような、未開人向きらしいキリスト教の特色は、ヨーロッパやアメリカの、従来の卓越した思想家の、所謂大乗的なキリスト教思想の中にも、何等かの程度に於て残存していることを、読者諸君は気附かれないだらうか？

又、「生きることの堪えがたさから救われたい、永久に回帰して生きることの恐ろしさから救われたい」と願

宗教その物としての大乗佛教対大乗キリスト教

うような文明人もしくは超文明人向きらしい仏教の特色は、いやしくも眞實に仏教徒と云われることを値している限りのこれまでの如何なる大乗主義思想家の思想の中にも、必ず何等かの程度に欠けていないと云うこと、この事をも読者諸君は気附かれないだらうか？

処で、最近のヨーロッパとアメリカとは、全く初めてではあるが、しかしながら到頭、文明にすぎるほどの文明な社会へ来てしまつた。そこでは人々が遂に、「生きることの堪えがたさから救われたい、永久に回帰して生きることの恐ろしさから救われたい」と云う風に感じはじめている。ニーチェの言葉をかりれば、彼等もまた漸く、仏教に適當するまで成熟して來たのである。

そして仏教に適當するまで成熟して來たということは、畢竟、それだけキリスト教に適當しがたい処までやつて來たということを意味しないだらうか？

「汝心を尽し、心ばせをつくして主たる汝の神を拝すべし」は宗教その物としての大乗キリスト教に於ける一根の根本精神である。「汝自らを愛する如く汝の隣人を愛せよ」は今一の根本精神である。

この二の根本精神が同様に最も肝要なものであることは、四福音書に明示されている。序に、その何れかを逸すれば、同時に他の一をも全うしがたくなるということが、イエス自らの口を通じて、語られていなかつたのは遺憾である。

ルーテルやカルヴァインなどの宗教改革は「神を挙げる」ことの方面に於てキリスト教本来の姿へ引き返そうとした。そして彼等の反抗運動に依つて公教会の外に、彼等に對立する「反対改革」の運動によつて公教会の

内に、多少の効果を収めなかつたのではない。

けれども、いかにヒイキ目に見ても、彼等の宗教改革が、日本の鎌倉時代に於ける各宗祖の仏教復興運動なぞに比べれば、同日に談じられないほど調子の低い、深味のないものであったと云わざるを得ないであろう。

その事の原因と理由とは何處にあるか？ ほかでもない。彼等の復興運動が「神を拝する」ことの方面にのみ眼目を置いて、「人を愛する」ことの方面を軽視していたからである。

近代ヨーロッパに於ける社会主義運動は少なくともその当初、「人を愛する」ことの方面に於て、キリスト教の真の精神を發揮しようとしたものである。

キリスト教社会主義及びそれの延長としての所謂空想的社會主義の殆んど總ては、ある見方からすれば、ルーテル、カルヴァインなぞの最初の宗教改革に対し、「一度目の宗教改革」とさえも云われ得るだろう。

併しこの二度目の宗教改革は、「汝心を尽し、心ばせをつくして主たる汝の神を拝すべし」の方面に、即ち神と人との関係に於て、自分自身を神の如くすることをお留守にしただけそれだけ、「汝自ら愛する如く汝の隣人を愛せよ」の方面に、即ち人と人との関係に於て、隣人達を神の如くすることをも、結局いい加減な態度でやつていたことになり、余りにもみすぼらしい成績しか挙げ得なかつた。

隣人愛から出た社会主義運動は、やがて一方には唯だ「自由と平等」との天国を説くだけで、その標的への手段を具体化するに至らないでいる「人道主義」や「アナーキズム」となり、他方には手段の具体化を求めて、唯物史観的ないし経済史観的迷路に陥つたところの、そして当初の目的が何であったかをも忘れてしまつたところのマルキシズムとなつた。

権力又は強権を否定する点に於て、人道主義もアナーキズムも異なるところはない。ただ、前者は先ず自分自身の上に権力を否定する故、立派に手も足も出なくなり、後者は先ず他人の上に強権を否定する故、折々發

宗教その物としての大乗佛教対大乗キリスト教

作的の強権行動を自分自身に許容するというだけの相違である。

理論上の詭弁はとにかく、実践上、奪還と復讐とて大衆の血を湧かそうとしているマルキシズムは、「目に目を償い、歯にて歯を償え」の道を邁進しているもので、キリストの精神へよりも、宗教その物へよりもむしろ明白に、最悪の意味でのユダヤ人的律法へ引き返そうとしているのである。

深く物を考えない人達は、ヨーロッパ人やアメリカ人がキリストの教えを信奉していたにもかかわらず、あんな間違った社会情態を、人ととの関係を、そのままにして来たと言い、それ故キリストの教えが全く無力なものであることを証拠立てていふと言う。

だが、事実は多少の思慮ある何人にも明らかであるう如く、キリストの教えその物が無力なのでもなく、キリストの教えを信奉したことが無益なものでもなく、むしろああした外見にもかかわらず、キリストの教えを本当に信奉していなかつたことが、あの不幸なる社会情態のそのままにされていることの原因なのである。

人類が人類らしく生きて行く為には、単に所謂社会問題だけが問題であつてはならぬ。のみならず、その所謂社会問題を本当に解決することすらも、一面に己自らを神の如きものにすることの敬虔なる努力が伴わなければ、成功らしい成功を期し難い。

所謂社会問題を中心として最も急迫的に「西洋の没落」——シュペングラーの——を暴露している欧米人等がこの場合に於て首尾能く活路を開き得るや否やは、一に懸つて、彼等が宗教的に再びなり得るや否やに存する。

キリスト教的に意味であるならば、彼等欧米人等の再び宗教的になり得るや否やは、少なくとも甚だ言い易からざる問題であるのみならず、卒直に物を言う人々の多数は、それが殆んど絶望的であることを断じてしまうかも分らない。

なぜと云つて、生きることに勞^{つか}れて、むしろあらゆる意味での生命をさえ願わないまでの、高度の文明もしくは超文明に到達したる今日のヨーロッパ人アメリカ人は、永久の生命を約束するという、未開人向きの宗教としてのキリスト教に対し、漸くふさわしからぬものになりはじめているからである。

宗教その物としてのキリスト教と仏教とは、とくに大乗キリスト教思想と大乗仏教思想とは、勿論その全範囲の上に別々のものを有つているのでもなく、また敢えて高低、広狹の差異を有つてはいるのでもなく、更にまた、奥深くはいり込んでからの安立情態を一にしない、というわけのものでもない。

ただ、門戸を異にして居り、門戸をくぐる際に於ける目のつけ処、力の入れ処を同じゅうしていなだけのものである。

そしてこの門戸の問題として、如何なる意味でもキリスト教的な一切のものが、頗る欧米人の関心をつなぎがたくなつてきていているということを誰が疑うだらうか？

今日欧米の先覚者等にとって、東洋の、別して大乗仏教の研究は、もはや单なる好事でもなく、单なる研究の為の研究でさえもない。それはむしろ、彼自らと西洋とを「西洋の没落」から救い出さんが為、少なくともその手懸りともなるべき物を探り出さんが為である。

「重苦しき生命」よりも「生命からの軽やかな釈放」を願求する、文明人ないし超文明人向きの仏教は、生き

宗教その物としての大乗佛教対大乗キリスト教

た宗教として現在の世界に、キリスト教より以上の働きをしているとは思われない。

けれども、その概念を欧米人等が取り入れて單なる概念より以上のものにまで還元し、その思想を輸入して單なる思想より以上のものに復活させるというのは、決して不可能の事とも思われないではないか？

かくして久しく「概念」と「思想」との中にのみ仮死の情態をつづけて来たところの佛教が、今後のヨーロッパとアメリカとに於て再び瀬渦たる生命にまで呼び覚まされ、その事によって又、「西洋の没落」から西洋を救い出し得るかも知れないと、そう云う風に想像して見るのは笑うべき事だらうか？

勿論、佛教によつて再び宗教的になり得たところの欧米人等が、やがて何等かの新しき形に於て、一たび棄て去つたキリスト教をも再び拾い上げることは、随分とあり得るだらう。

或は、輸入された佛教の刺戟と影響とは、割合に早くキリスト教その物をも元気づけ、両々相携えてヨーロッパとアメリカとを新生命へつれ行くかも分らない。

ともあれ、差し当つては、キリスト教は——大乗キリスト教的思想をも一にして——欧米人等の関心をいよいよつなぎがたいものとなり、それと共に、佛教は現在アジアに生きているより以上にさえ、ヨーロッパとアメリカとに於て生きはじめるこゑを疑えそうにない。

ヨーロッパ人とアメリカ人とが、キリスト教にふさわしからぬほど文明人、もしくは超文明人になつて來た時、またいよいよそなつて行く時、まだまだ多くの種族と社会とが未開、若しくは半開の状態にとどまつてゐる。

それらの未開人や半開人達にとつて、キリスト教が今後もなおいかに有為の宗教であり、必要の宗教でさえあることを誰が否定し得るか？

SAMPLE
Shoshinsho.com

インドや支那の如く、過去の燐然たる文化から、それぞれに若干の退歩をなして、現在の謂わば未開的、ないし半開的情態にまで引き返している点に於ても、キリスト教は将来の大なる活動分野を見出し得るであろう。或はキリスト教によってより高き文化情態にまで引き上げられることを期待していいだらう。

我が日本は「維新」革命以来、西洋文明を採り入れるのに急なる余り、自分自身の有する文明を閑却し、自分自身を未開半開なるものにさえ思つて来た。

西洋人等も大多数は、彼等自身のと余りにも異なるものである故に、日本の文明を文明として見ず、日本を可なりの未開国半開国とのみ看なして来た。

こうした自覺錯誤と認識錯誤とこそは、日本人へのキリスト教宣伝を、明治の半ば頃まで、まことにすらすらと容易にはかどらせたものであり、同時に又、その後の伝道を意外に困難ならしめているものである。

少なくとも今日の日本人は、一面、インド人や支那人ほど過去の立派な文化をなくして居らぬということを、他面、欧米的な文化と文明とに於てすらも、余りに後進国扱いの出来ない處まで滲ぎつけて来ているということを、日本人自身からも自覺され、西洋の少なくとも先覚者達から認識されはじめている。

すなわち、日本人は、それが未開的ないし半開的な処を幾分残存している限りに於て、キリスト教的門戸から宗教その物へ導かれることを、全然不必要としているのでは勿論ない。けれども、それが西洋を輸入すると共に、必然に「西洋の没落」をも輸入して居り、やはりまたキリスト教にふさわしくないまで文明人らしく、超文明人らしくなり果てて居る限りに於て、今後欧米に輸入されて蘇生したところの仏教をも、またまた新しく逆輸入するような必要に迫られないだらうことを、そもそも誰が保証するだらう。

勿論、少しばかりの仏教逆輸入、または日本への再輸入は、殆んど生命のなくなっているところの在来仏教

宗教その物としての大乗佛教対大乗キリスト教

をも直に大いに元気づけ、大いに生きかえらせるかも分らない。

宗教その物としての佛教とキリスト教とは——このほかの諸宗教についてはしばらく言わない——特に大乗佛教と大乗キリスト教とは一方が西方へ、他方が東方へ移植されることに於て、それらの宗教自身をも生かし、西方と東方との人々をも生かすことが出来るであろう。

この二の宗教の帰一を承認するところの人々も、当面現実の問題としては、漫然たる提携などをすすめるに先だちて、それぞれの今後に於て分担すべき処を指示することの肝要なるを知つて貰いたい。

結局は同一の宗教的高処へ導き得るにしても、とにかく、キリスト教的門戸が未開人向きであり、佛教的門戸が文明人、超文明人向きであるという観察にまで、私に伴つて来た人々は、恐らくはキリスト教が人生を知らなさすぎる年少者達を引きつける上に於て仏教よりも有利な地位に立つて居り、仏教が人生を知りすぎた成年者達を満足させる上に於てキリスト教よりも強味をもつてゐるという今一の見方へも、たやすく同意して下さるかと思う。

こうした別々な特色は、互に他を学び取るべきであつて、在來の特色のままに、踏みとどまろうと頑張るべきではない。

即ち、仏教は十分年少者向きのものでもあり得るよう、キリスト教から学んだものによつて、出来得る限りの修正を加えらるべきであり、キリスト教は十分成年者向きでもあり得るよう、仏教から学んだものによつて、出来得る限りの改善を試みらるべきであろう。

また、右の如き二教の特色を認めた人々にあつては、年若き人々が、仏教的な思想へ近づきがたいように言うのをも、年少時にキリスト教の洗礼などを受けながら、中年頃から仏教的な思想へだんだん傾いて行つたりす

る者の少なからぬのをも、何等の不自然な現象と見るに及ばないであろう。

要するに、宗教その物としての仏教やキリスト教が、少なくともしばらくの間は将来にも持ちつづけるであろうところの特色及び、それにもとづくそれぞれの活動分野と、それぞれの使命について、以上私の述べた程度にさえ、エコヒイキなく観察し得ない人々があるとしたら、それらの人々は恐らく、仏教をもキリスト教をも——特に大乗的な思想としての——本当に信じないでいて、単に宗派心と「教権争奪」心だけで動いているところの、エセ仏教徒かエセキリスト教徒かであるに違いない。

(1931.3)

SAMPLE
Shoshi-Shinsaji.com

虫のいい「人類」　その他

近代的な、近代ヨーロッパ的な、当世風な総ての物が、いよいよ益々私の心から遠くなつて行く。私に面白くないもの、気に入らないもの、我慢のしにくいものになつて行く。

備忘録のようにして書きとめられた、これらの断片的な表白の中にも、所謂新しい思想や新しい感情と云われるようなのは一もあるまい。私は私自身の考え方感じ方を、むしろ余りにも新しすぎるのだと思わぬことはない。しかし、世間からして、余りにもふる過ぎるのだと言われることを、それほど気にしてもいないのである。

「民族の為」が一切の事物の価値を決定するのだとは、流石にもう大多数の一般群衆も信じなくなつてゐる。しかしながら、より新しき標準としての、理想としての「人類の為」が、これまでの「民族の為」などに比して、ただ僅かに一步を進めたものに過ぎないことは、今日果してどれだけの人々から氣附かれているだろうか？

私は決して厭人主義者ではない。のみならず、大体に於ては何物にもまして人類を愛しても居り又愛さなければならぬと思つても居る。

それにもかかわらず、人類の悉くを皆、一様に愛することが出来ない。そして出来ないのを不自然だと思わない。なぜと云つて、その或るものに対しては、非常に自分に近く、自分の同類であると感ずるけれど、他のものに対しては、それほど自分に近く、自分の同類であると感ずることが出来ないからである。

更に又、私達が人類の中の或るものより、ずっと好きな、ずっと愛すべき生き物を、人類以外に見出すというのは、実際に於てあまりめずらしくないところの私達の経験である。

例えば一方には、偽善者のほかなる何物でもないような宗教家、教育家など、及び偽善者たることの必要からさえ解放されて来ている、鉄面皮を第一の武器にしている、或は政治家と称する、或は実業家と称する紳士的無頼漢、無頼漢的紳士などを――

他方には私達の掌の上から穀物を食べる足の紅い鳩、尾を振りながら私達のあとについて来る小狗、青々と浪打つている麦の上を、ほがらかに歌いながら舞いながら雲雀、いな、青々と浪打つている麦その物、その隣に一面の菜の花、蝶々、それよりも可愛い、勤勉な労働者の蜜蜂、蟻などを――

これらの二種類のものを対照して見る時、どちらが私達の心にまでより近く、より親しいものであるか？どちらがより多く「異邦人」として感じられ、どちらがより多く「同類」として、同じ血の、同じ神經の通つている生きものとして、同じ悲しみをかなしみ、同じ悦びをよろこぶ友達同志として意識されるか？

人類の中にも、あれほど厭わしき生き物があり、人類のほかにもあれほど愛すべき生き物があるとしたら、人類という同種属感情、同類意識はもはや、それほど重要視るべきものではない。

人類なるが故に、人類ならざるが故に、一方がつねに他方を犠牲にしていいと云うのは、そうした意味をまでこめての「人類の為」は、もはや私達の感情と理性とのいずれからも承認されないとところのものである。

虫のいい、「人類」 その他

余りに重すぎる荷車につながれて、夏の日盛りなぞに、峻しい坂道の中程に立ちすくんでいる駄馬を見たまえ。彼は私達と同じ汗を流し、同じ太息をつき、また時としては全く同じように泣いているではないか？

私はあの馬方をも愛すべき漢であると思う。しかし、彼より以上に苦しんでいる故に、駄馬は一層賢く、一層人間らしくさえ見えるではないか？ 否、一層賢く、一層人間らしくさえ見える故に私達は折々あの馬方を幾分憎むべき男のようにさえ思うではないか？

諸君は、諸君の一寸した好奇心から、或は全くの偶然なる機会から、その手の中に小鳥を握って見たことはないか？

その時、可憐なる彼女は、その小さな体全体が心臓でもあつたかの如く、本当に命懸けな動悸を打たせながら、諸君及び諸君の姉妹等の有つてているのと丁度同じぬくもりを諸君の掌に感じさせなかつたか？

そして諸君はまた、次のように口の中で言いながら、再び彼女を自由にしてやらなかつたか？

「何も心配することはありませんよ、お嬢さん！ 貴女のような可愛い人に對して、誰が害を加えるでしょう！」

神が人類を幸福に生きさせる為に、人類以外の総ての生き物を造つたという、虫のいい伝説を信じているヨーロッパ人等も、動物愛護を言わないのではない。しかし彼等のそれを言う理由はこうである――

特に子供等が動物を虐待したり、動物の虐待されるのを見たりすることは、彼等の心情を荒々しく、むごたらしいものにする。そしてその結果は、互に愛し合つて行かねばならぬ人間の道徳的向上に障害とならざるを得ないというのである。

依然として、これは「人類の為」ではないか？ 人類以外のすべての生き物を手段とする、人類中心の考えではないか？

神が人類を幸福に生きさせる為に、人類以外の全ての生き物を造ったという伝説に、数十世紀の間を養われて来たヨーロッパ人と、幸にして今なお輪廻観念の全くならないでいる私達東洋人とを、この場合同一に考えることは許されない。

私は仏教に説くところの如く（或はそれ以上にジャイナ教に説くところの如く）、輪廻をそのままに信じてもいいような心持にさえなっているのだが、それはこの場合の問題に対することを控えよう。

ともあれ、総ての生き物は生き物として、平等にその生命を愛惜されなければならぬ。なぜと云つて、それらの生命は悉く皆、一の大きな生命につながっているのだから。その一の大きな生命の部分部分に過ぎないのだから。本当の生命はただ一つしかないのだから。生命は一つとも一つ以上とも数えることの、単に「生命」というよりほかに言いようのないものだから。

無数の、より小さな生命から構成されているという意味に於て、その内にある一切の物が生きているという意味に於て、最後に全体として、最も大なる、恐らくは永久的なる生き物であるという意味に於て、この宇宙は明白に生命である。生命の生命である。

生命としての宇宙は、殆んど死の如く、無限に深い眠りの底から、次第次第に浅い眠りの方へ浮び上り、ともかくも現在の処までやつて來た。夢うつの間にあるとも、半ば目ざめているとも、云えば云えるであろう。

SAMPLE
Shishi-Shinsui.com

虫のいい、「人類」　その他

そしてこれからもいよいよはつきりした覚醒の方へ浮んで行き、ついには神の如き、無限に明るい意識情態にまで到達することであろう。

宇宙は、「生命」その物は、全体としての生物は、間もなく進化して行く。そこには単なる小部分としての退化だけがある。より多く進化せんが為の、より少なき退化があるに過ぎない。

しかしながら、無限から無限への生命の大きな流れに、特に或る区域をかぎつて見るならば、その経過はつねに必ずしも進化的であるとも限らないであろう。

例えば今、所謂原始動物（私共は、原始と云う言葉をあんな場合に用いたくないようにも思うのだが）アメリカから人類までの経過が、大体に於て進化の歴史であるということは承認してもよい。

しかしながら、人類が一たび人類になり得てから今日までの経過は、大体に於てすらも、果して進化であったか？それとも退化であったか？

少なくとも、有史以来に範囲を限つて云えば、人類が單により複雑な、より手の込んだ生き方をするようになったというだけでなく、道徳的にも美的にも、本当に立派なものの方へ、だんだんと進化して來たのであるか、それとも反対であるかは問題である。そうだ、如何に控え目に云つても問題である。

あとからあとから発掘され、発見される古代の諸事物を見る度毎に、古代人がその中から少数の巨人的天才（後代に至ってはそれに似通つたものをさえ見られないような）を産出したばかりでなく、彼等全体としてまた実にすばらしい生活と仕事をしているのに、つくづく私達は感嘆し敬服する。

進化か退化かの問題を具体化する為には、人類が上前をはねること、利子を取ることを覚え、器械というも

のを発明したことを考えて見るのは必要な事だ。

特に、人類自身がその手足の延長のつもりで作り出した器械という怪物——あの怪物がさかしまに、その手足の延長として人類を使役している近代人の憫笑すべき「文明」生活の有難味を、解剖分析して見るのは必要なことだ。

幾十倍幾百倍の生産力を加えながら、人類の大多数は住むに家がなく、まとうに衣服がなく、食うにパンすらもない。しかもその不可思議なる生産力の正体をつきとめて見ようともせず、その正体が如何なる吸血鬼であるかを突きとめても、さてそれをどうすることも出来ないよう、愚鈍な懦弱な、これでも人類の子孫かと慨かれるような現代の人類を、考えて見るがよい。

そして、人類は決して進化をやめていないし、退化への、頽敗への、破滅への道を急いではいないと、ああ、果して誰が言い得るか？

いつその事、一息に破滅してしまえと、私の口は極度の興奮にふるえながら、反語的にはげしく絶叫するかも分らない。

しかし、私自身もその一人として、心の底の奥底に、どうして人類の絶滅を痛快がることがあらうぞ！

それでも明白に下り坂に向っている人類が、再びその勢いを盛りかえして来ることが出来るや否や、今ひとつ進化的の経過を取るようになり得るや否や、それはただ神だけが知っている。然り「人類の為」に人類以外の総ての生き物を造ったエホバ神よりほかなる、何等かの新しき神だけが知っている。

ともあれ、人類の絶滅は、全体としての生物の運命にとって、生命その物の大きな流れにとって、それほど

SAMPLE
Shoshi-Shinti.com

虫のいい、「人類」　その他

の問題ではないかも知れない。むしろ、全く何でもないほどの小事件かも知れない。そして人類よりも一層人類らしき、より高級な、すばらしく立派な種属が、直に、または適当な時期に於て、補充的に造り出されるかも知れない。

人類の絶滅が直に宇宙の解体でもあるかのように、或は宇宙の存在を無意義にするものでもあるかのように考え、またそれ故に、そう易々とそんな事があつてはたまらないと云う風に考へるのは、全く救うべからざる人類の虫のよさ加減である！

だが、ある見地からすれば、人類が現在向つてゐるような絶滅は憂うべく恐るべき物であるけれど、絶滅の性質次第では、必ずしも気にするに及ばないのである。

個体も種族も、その托せられたる使命を十分に果したあとでならば、死んで行くのに何の悲しむべきことがあらうぞ！

また彼等が、その托せられたる使命を十分に果し得ることの為に死ぬのであれば、彼等はその死によつてこそ最も善く生きたのではないか！ 永遠の生命を生きたのではないか！

近代人と称する愚者等の賢げに言つてゐるところを聞けば、生きている者は、単に生きることの為にのみ生きているようである。

だから彼等にとっては、少しでも余計に生きていれば、それだけ幸福で、そして有意義のようである。彼等の大なる迷信と第一信条——「種族の保存」の如何に笑うべきものであるかを見よ。

古来、仕事らしい仕事をした人間は、いずれも皆、その仕事の為に生き、その仕事の為に死んでいると云つ

ていい。

生を甲斐のあるような生き方をした人間は、その事の為に死期を早めているのみならず、多くの場合、あとに子孫を残していない。残そうとさえしていない。そして、それでいいのだ。

天才者とか大偉人とか云われる人達には、まれに子孫があつても、それは大抵格別の人物でないむしろ平々凡々以下であるのをつねとする。そして、それはまた仕方のない事ではなかつたか？なぜと云つて、その天才者や大偉人達は、子孫達が手伝つたり補足したりする余地のないほどに、その一代の間に一通りの事業を完成してしまつたのだから。かなり生き甲斐のある生き方を、思い切り生きてしまつたのだから。

レオ・トルストイも言つてゐる如く、人が子供を造らねばならないのは、自分の仕残した仕事を子供にやらせる為にほかならない。

気長に、或はいい加減な熱情で、理想の実現を志している「近代的」な理想家達よ、君達は何をおいても、君達のあとに、子供を残して置くことを忘れるな！そしてその子供が幸に君達ほど無精ものでないようになると祈願して置くことを忘れるな！

これまでも度々言つた事だが、一切の愛は性的愛から、性慾から、陰陽の対立和合から生れる（ここいらがやはり、私の考え方感じ方の当世風でない点である）。これを逆に云え巴、性慾や性的愛から骨肉近親への愛も生れ、隣人への愛も生れ、最高のものとしての、一切衆生への、即ち神への愛も生れて来る。

性慾や性的愛が根源である故に無視しがたいと云い、無視してはならぬと云うのは正しい。それ故に最も尊

SAMPLE
Shoshi-Shinji.com

虫のいい、「人類」　その他

いものであるというような「近代的」諺見に墮してはならぬ。
一切衆生への愛、即ち神への、絶対者への愛は、最終の派生物であつて、同時に私達の生活の最高標的であることを知らなければならぬ。

差別の愛は出発であつて、無差別の愛は帰着である。

差別の愛に対してすら資格のないものが、どうして無差別の愛を知ることが、体験することが出来ようぞ！
「一切」を愛し、「神」を愛するに至った者も、妻子等を愛しなくなつたのではない。さまざま小さな愛を、
大きな一の愛の中へ融かし込んでしまつたのだ。百川の水が大海におさめられてしまつて跡なきが如く。

夫と妻との間に於てさえも、性的愛が低下するのではなくして、むしろ反対に向上去して行つた末、單なる性的
愛以上の愛が、最もよき兄と妹との間に、最も理解し合つた友人と友人との間に、最も堅く誓い合つた戦友と
戦友との間に見る如き愛が生じて来るにつれて、彼等はだんだんと相互の性的交渉を超越して行くようになる。
彼等の中のいずれかが、又はいずれもが「一切」を愛し、「神」を愛する方へ、めざましく成長して来る時、
彼等は自らにして、必然に貞潔の生活へはいって行かねばならぬであろう。

マタイ伝第十九章には、「近代的」クリスティヤンがその心の目を閉じ耳を塞ぎながら、読みすぎるところの
文句がある。曰く――

「この言葉は人々受け容ること能わじ。ただ天賦ある者のみこれを為し得べし。それ母の胎よりして生れ
つきたる寺人あり。また人にせられたる寺人あり。これを受け容ることを得る者は受け容るべし」と。

使徒パウロもコリント前書第七章に於て言つてゐる――

「我は總て人々が我が如くせんことを願う。されど人々神より己の賜物を受けたり。これはこれの如く、かれはかれの如し。我未だ婚姻せざる者及びやもめに云わん、若し我如くしてあらば彼等に善きなり。若し自ら制うる能わづば、婚姻するもよし。そは婚姻するは胸の燃ゆるよりもまさればなり」と。

彼は又言つてゐる――

「汝等我に書き送りし事については、男の女にふれざるを善しとす。されど淫行を免るる為に人々その妻を有ち、女もその夫を有つべし」と。

性、結婚、超結婚等についてのトルストイの意見は、彼自らの公言している如く、耶穌によつて暗示され、パウロによつて細説された、あの正しい意見をそのままのものである。

私もまた敢て公言する――私の性、結婚、超結婚等についての意見は、大体に於てトルストイ等の意見と同一のものであるということを（ここいらは、特に「近代的」ならぬ印象を与えることであろう。）

イエスや、パウロや、フランシスのような貞潔な生活を送る人達が、だんだんと数多くなつて行くならば、それだけ人類という種属は「種属の保存」を危うくされるであらう。そして、人類の悉くが皆貞潔の生活を送るようになつた暁を想像すれば、それは余りにも明白な人類の絶滅である。

だが、人類にして若し、それほどの完成にまで到達してしまつたのであれば、それは人類にとつて何という悦び、何というすばらしい光栄であらう。それこそ人類が人類全体として、永遠不朽の生命にはいったものというべきではないか！

虫のいい、「人類」 その他

貞潔の生活は「近代的」な思想家達が言う如く、不自然なものであるとばかりは云われない。

それは、ある人間にとって十分不自然であり得る。同時に他の人間にとって、いささかも不自然であり得ない。

同一の人間にあっても、ある時期までは不自然であつた貞潔の生活が、他の時期に入つてからは極めて自然なものになることもあるだろう。

植物がその茎や幹に於て、遺憾なくその植物らしいところを發揮し得た時、葉はもうどんな葉であつても構わないように見えるではないか？ 花は咲いても咲かなくとも、少しも心残りがないように見えるではないか？ 咲き過ぎる位に、美し過ぎる位に、思い切り美しい花を咲かせきつた草や木が、どんなに小さな実を結ぼうとも、それなら結ばなかろうとも、私達は決して怪しまないではないか？ 敢えて咎めようとしないではないか？

フリードリッヒ・ニーチェは言う、「結婚した哲学者というものを想像するのは、一のユーモアである」と。この場合の哲学者といるのは如何なる物の謂いであるか？

パウロからして「命ずるにあらず、許すなり」と刻印を打たれた結婚に、今一つ痛快な但し書きのついていふことを見逃してはならぬ。曰く、「しばらく祈りの為に別れるは善し」と。

しばしば祈りをなさんとする者は、しばしばその妻から、その夫から別れねばならないではないか？

長く祈りに居ろうとする者は、長く別れて居らねばならないではないか？

そして一生をつねに祈りにささげようとする者が、どうしてその妻と、或はその夫と共にあることが出来ようぞ！

妻の夫に、夫の妻に対する愛、親の子に、子の親に対する愛は、それが愛である限りに於て尊く美しい。

だが、それよりも遙かにまさつて尊く美しいのは、「一切の衆生」に対する、「神」に対する愛である。

のみならず、夫婦の愛、親子の愛などが尊く美しいのは、最高愛の方へ少しずつでも引き上げて行くような要素を、その内に有しているからである。

そうした崇高な要素を欠いていそうな男女間の愛、骨肉間の愛が、尊く美しいものであるよりも、むしろ卑しく醜いものであることを諸君は理解してくれるだらうか？ それとも理解してくれないだらうか？

釈迦牟尼等はその妻子を捨て、その家を出でて道を求めた。

彼等がかくしてまでも道を求めるはいられなかつた所以を想い見よ。或はその妻子を愛する心に於てすらも、常人の思い及ばざるほどの深いものを有つていた故に、常人のやすらかにしているところに、その如くやすらかにしていることが出来なかつたのであらうとこう見るのは、甚だしく不自然な、無理な、出鱈目な想像であろうか？

彼等が最高の平等愛に到達した後の、その妻子等に対する愛を想い見よ。或は、出家の前にもつっていたより一層純粹な、一層清高な愛を以てすらも、その妻子等及び妻子等の面影に對していなかつただらうか？

私は近頃、釈迦牟尼とその子ラゴラとの關係を、不確実な様々な伝説の中に手さぐりしながら、しみじみと右の如き事を思つたのである。

宗教も特に仏教にあつては、出家求道が宗教生活——その予備的なものは別として——に於ける第一条件でなければならぬ。

けれども、その事の故に宗教も特に仏教が、苦行をすすめたり、強いたりするものであると理解すべきでな

SAMPLE
Shoshi-Shui.com

虫のいい、「人類」 その他

い。

釈迦牟尼の如きは、その言説と実行とのいずれにおいても、明白に放逸を斥け、同じく明白に苦行を斥けている。

苦行にもあらず、放逸にもあらざる、所謂中道の生活は、生命をつなぐに辛うじて足りるほどの生活である。精しくは、心静かに四諦を觀するに適當して、簡素なる、けれども肉体を苦悩するところなき生活の謂いである。甚だしく足らざるところなき、されどいささかも過ぐるところなき生活の謂いである。

かくの如き生活を志して、苦行にも堕ちず、放逸にも流れざるは、決して容易の事ではない。
のみならず、かくの如き生活を生き、且つ生きさせたが故に、釈迦牟尼の如きはしばしば安逸をむさぼる輩の一人として、別方向にあつたところの当時の求道者達からして非難されたと云う。ナザレのイエスもまた、苦行者のそれと異なる生活をしていた故に、しばしば世上の楽しみに耽る者としての誹りを受けたよう見える。

釈迦牟尼やイエスの生活は、甚だしく足らざるところなき、けれども又いささかの過ぐるところなき生活を理想としたものとして、所詮エピクール派の所謂享樂生活の最も純粹なものから、余り遠くなかったではなからうか？ 同時に又、ストイーク派の所謂克己生活の最も程よき物と、殆んど撰ぶところがなかつたではなからうか？

そして今、又してもしみじみと考えさせられるではないか？——本当に正しい生活は、享樂でもあり克己でもあるような、もしくは享樂でもなく克己でもないような、所謂中道の生活であるといふことを！
(1924.3)